

第九部会

陰陽道における「神話」の意義

小池 淳一

陰陽道においては『簠簋』および『簠簋抄』における①『簠簋』伝来説話（巻一卷頭）、②牛頭天王縁起（巻二巻頭）、③五龍王説話（巻三巻末）の三つを「神話」として扱うことが可能である。これらは、陰陽道の教義の解説や意味づけの前提となる、聖典（『簠簋』の由来）、主祭神（牛頭天王の出現と性格づけ、五龍王による秩序の形成）に関する一定のまとまりを有する説話群であり、陰陽道という呪術的宗教体系の起源を説話的に表現したものである。

ここでは、これらの「神話」の分析を通して、陰陽道がどういった観念と親和性を持っているかを解明することを目指したい。既に『簠簋』および『簠簋抄』における説話群については渡辺守邦による先駆的な検討がある（『簠簋抄』以前）『国文学研究資料館紀要』一四号、一九八八年、『簠簋抄』以前・補注）『説話論集（四）近世の説話』一九九五年等）。それによると、①『簠簋』伝来説話は、I天竺から唐への伝来（文殊菩薩から伯道上人へ）、II唐から日本への伝来（吉備真備への唐での試問）、III龍宮からの伝来（安倍童子、「聴耳」の力を得る）、IV童子の母は狐（「信太妻」）、V道満との争い（一）、VI九尾の

狐とその討伐、VII道満との争い（二）という別々の七つもの説話をつなぎ合わせたものであり、それぞれ出典が想定できるといふ。そのなかで、III、IVは、当時の民間における説話を取り入れたものとされている。IIIと②において牛頭天王が「龍宮」を訪問して妻となる波梨采女を獲得すること、③において時間の支配を争うのが五人の「龍王」と造型されていることを意識すると、陰陽道の「神話」は龍宮世界との関連をくり返し主張していることが指摘できる。

この点について、民間に伝承された①②③の「神話」の展開に着目して考えてみたい。三谷栄一は龍宮を富がもたらされる古代の常世と重ね合わせて理解し、中国地方の田唄の詞章に②の説話が流入し、田の神であるサンバイの神格に影響を与えていることも指摘している（『古事記神話の構成と陰陽道』『古典文学と民俗』一九六九年）。大島建彦はさらに、このサンバイ神に御霊的な性格を見出している（『田の神とサンバイ』『西郊民俗』一八〇号、二〇〇二年）。ここからは稲作に不可欠な水への希求とそれを統御する存在への信仰を見出すことができよう。

一方、昔話の話型「聴耳」「狐女房―聴耳型」はIII、IVを起源とするものにとらえられてきたが、各地の伝承例を検討すると、「草紙」と呼ばれる呪宝が登場するものと、それ以外のさまざまな呪宝が描かれる場合とがあることが判明する。前者から『簠簋』との関連がうかがえる点も興味深いが、後者は、昔話伝承の中でも龍宮世界への関心が受けつがれていたことを示すものであろう。

そしてその龍宮世界が、三谷栄一(前掲論文)が指摘するよう四方に四季を配する、いわば時間を統括する場所として古代以来とらえられてきたことから、陰陽道「神話」における龍宮は時間を見渡す場所として設定されており、暦の根源の空間とでもいべきものであることが見通せる。だとすると陰陽道の「神話」における龍宮への執拗な意識や言及は、時間秩序が生み出される場所としての龍宮の重要性をくり返し表現、強調しようとしたものであると理解することができる。

これが時間意識の表出の形態が先行するのか、古代以来の常世や龍宮への意識がこうした時間表現を引き寄せたものか、については他の神話や説話を材料として引き続き検討を加えるべきであろう。

〈殺す神〉としての須佐之男命について

小濱 歩

『古事記』における須佐之男命は、暴力的に振る舞い、様々な混乱を引き起こす存在として描かれている。また、出雲降臨以前と以後とで、その性格を異にするかに見える点もしばしば不審とされてきた。しかし、〈殺害〉を通して新たな秩序形成への転換を促す働きを見て取ることができる点で、同神の事跡には一定の共通性を見て取ることができる。

具体的な検討の対象として、(1)伊耶那岐命から委任された海原の統治を放棄して泣き続け、青山を枯山になし、河海を泣き

干したこと、(2)高天原において「勝ちさび」に様々な乱暴を働き、天服織女を殺害すること、(3)祓を科されて高天原から追放された後、大宜津比売を殺害すること、(4)出雲に降臨して八俣大蛇を退治すること、(5)根之堅州国を訪れた大穴牟遲神に過酷な試練を課したこと、以上五つの事跡を取り上げるならば、それぞれについて以下のことを指摘できる。

すなわち、(1)は地上世界の荒廃をもたらし、遂に伊耶那岐命によって追放されるが、このことは伊耶那岐命が依さした三貴子の分治体制を否定するとともに、新たな世界秩序への模索へと繋がってゆく、(2)高天原の秩序をいったん崩壊せしめ、天照大御神の石屋戸隠りを引き起こすが、それがむしろ天照大御神の再生による高天原秩序の更新と、三種の神器の鏡・玉を整える契機ともなる、(3)女神の殺害が五穀の発生と農耕の開始という生産的事態へと接続し、また神産巢日神の五穀の種の採取が、その子少名毘古那神の大国主神への協力というかたちで、葦原中国の国作りに寄与する、(4)八岐大蛇退治は葦原中国開拓の第一歩であるとともに、その尾から獲得した草薙剣を天照大御神に献上することは、三種の神器の剣を整え、国譲りの伏線ともなる、(5)大穴牟遲神に対して生命を脅かすような試練を繰り返す課すが、これは成年式儀礼における擬死再生の觀念を背後に有し、結果大穴牟遲神は大国主神へと成長して葦原中国の国作りを開始する。

このように、須佐之男命は暴力的・破壊的に振る舞っているかに見えて、しかし、その行動は常に何らかの新しい秩序の創出(旧秩序の否定と更新)の契機となることが見て取れ